



順に、松本市左衛門「呼吸器広告」1879年（宮武編 1925、69頁）、ミクリッツの手術室（S. Hiki & Y. Hiki 2005）、桃山病院、1900年ころ（『大阪市立桃山病院 100年史』1987、222頁）。

参考文献

- S. Hiki and Y. Hiki, "Professor von Mikulicz-Radecki, Breslau: 100 Years since His Death," *Langenbeck's Archives of Surgery*, 390 (2005): 182–185, <https://doi.org/10.1007/s00423-005-0550-y>.
- 宮武外骨編『文明開化2 広告篇』半狂堂、1925年、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1182351/>.
- 住田朋久「鼻口のみを覆うもの——マスクの歴史と人類学にむけて」『現代思想』第48巻第7号（2020年5月）、191–199頁。
- T. Sumida, "Western Origins of Japanese Plague Masks: Reflecting on the 1899 German Debates and the Suffering of Patients/Doctors in Japan," *East Asian Science, Technology and Society*, Forthcoming (2021).
- 住田朋久『『ペスト』に見るマスク着用の始まり——1899～1900年、大阪・肺ペストクラスターと医師の遺言』『週刊医学界新聞』第3415号（2021年4月5日）、3頁、https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2021/3415_02。

病原菌を手懐ける技法——近代日本における結核の発病予防

塩野麻子*

本報告は、結核の発病予防に関する言説を検討することで、近代日本における個人衛生の浸透を考察するものである。

近代日本の結核予防に関する先行研究は公衆衛生の視点によるところが大きく、身辺の清潔や病者の隔離を中心とした感染予防が探究の焦点となってきた。しかし Daidoji (2018) や北川 (2021) など近年の研究では結核と「体質」論との関わりも注目されるようになり、感染経路の遮断にとどまらない結核予防の可能性が示されている。

これらの成果に示唆を得たうえで本報告は、近代日本で見出された結核の「発病予防」すなわち結核の感染を前提に個人の体内で結核菌を統御することを目指した予防方法に関する言説を検討

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科／日本学術振興会 Email: gr0370xp@ed.ritsumei.ac.jp

し、近代日本における疫病への個人衛生的対応の局面を明らかにすることが本報告の主旨である。

西欧では20世紀初頭にツベルクリン反応が実用化され、結核は病原菌の感染が必ずしも発病に帰結する疾病ではなくしかも「文明国」の人口の多くが成人になるまでに結核感染を経過すると考えられるようになった。結核の感染と発病に関する「最新」の知識は同時期の日本にも伝わり、公衆衛生的な対策とは別に、病原菌の感染を前提とした発病予防が模索された。戦前期には、一般向けの結核書の普及とともに、発病予防の技法が一般の人々にも共有されるようになった。

本報告では、原栄『肺病予防療養教則 大改訂第17版』(1921年)など複数の結核書の発病予防に関する記述を紹介しながら、結核の発病予防がどのように共有されてきたのかを検討した。検討から浮かびあがってきたことは、近代日本における結核の発病予防が体内に侵入した結核菌を病気に対する「免疫」として手懐けることを目指していたことである。それは、次の3点において、公衆衛生的な対策とは質的に異なるものだった。

第一に、近代社会に生きる人々を潜在的な結核者とみなした。結核の感染は「成人」になるための通過儀礼へと、その意味を変えた。第二に、病原菌を体内に引き入れて初めて結核(菌)を統御の対象にすることができると考えられた。感染予防は有効ではないどころか病気に対する行き過ぎた恐怖心を引き起こすものとして否定的にとらえられた。第三に、発病を防ぐ手立てとして身体的・精神的「過労」すなわち過度の労働や勉強、房事過多、煩悶憂鬱など個人の行動や思考の「過剰」さが重視された。そうした認識が、結核予防に精神医学や体質医学などが介入する契機をつくった。

これらを踏まえると、結核の発病予防、結核への個人衛生的な対応をめぐる言説は、個々人の身体・精神のあり方に関心を向け、自己への配慮に邁進する不特定多数の「潜伏結核」者を産みだしたといえる。

以上の検討を通じて本報告は、想像力を駆使してあたかも体内の病原菌を手懐けるように人間そのものを統御することが、行政などが進めてきた対策とは別に構想された、もうひとつの結核対策だったことを指摘した。

本報告に対してはコメンテーターの鈴木晃仁氏より、近代日本における結核の発病予防から、一度病原菌を甘受し「免疫」を獲得することに価値を置く新たな「健康」概念の出現を読みとることができることと指摘いただいた。疫病への馴致を重視する考え方は、天然痘や黄熱など他の感染症の歴史にも見出すことができるだろう。今後は、結核と他の感染症とを比較しながら、人間の病原菌に対するはたらきかけの歴史的諸相をさらに探究したい。

参考文献

- 青木純一『結核の社会史——国民病対策の組織化と結核患者の実像を追って』御茶の水書房、2004年。
- K. Daidoji, "The Formation of Constitutional (Taishitsu) Medicine in Early Twentieth-Century Japan: The Scrofulous Constitution (Senbyoshitsu) and Tuberculosis" *Historia Scientiarum*, vol. 27, No. 2 (2018): 199–217.
- 福田真人『結核の文化史——近代日本における病のイメージ』名古屋大学出版会、1995年。
- 北川扶生子『結核がつくる物語——感染と読者の近代』岩波書店、2021年。
- 香西豊子『種痘という〈衛生〉——近世日本における予防接種の歴史』東京大学出版会、2019年。
- K. Olivarius, "Immunity, Capital, and Power in Antebellum New Orleans" *The American Historical Review*, vol. 124, No. 2 (2019): 425–455.
- 塩野麻子「戦前期日本の通俗医学書における結核の発病予防をめぐる言説」『コア・エシックス』第16巻(2020年)、97–108頁。
- 常石敬一『結核と日本人——医療政策を検証する』岩波書店、2011年。